
白夜とリコー達がたどる道

2ツノ心

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白夜とり「一達がたどる道

【NZコード】

N0515D

【作者名】

2ツノ心

【あらすじ】

大人達の戦争に巻き込まれた2人の少女がいた。2人とも親や兄弟と、生き別れてしまった。そして、戦争が終わり、大人になった2人は世の中を旅をしてく。旅先ではいろいろな人と出会っていく。

第1話 プロローグ（前書き）

はじめまして。

2ツノ心と申します。初めて投稿する小説でとても緊張しています。
評価をよろしくお願いします。

第1話 プロローグ

プロローグ

広大な砂漠に囲まれた街がある。人々が憩いを求める街だ。

しかし、今は真黒な煙が街のいたるところで空にむかってたち昇つっている。

黒い煙の合間から見える蒼い空には、幾重の機影を残して戦闘が繰り広げられている。戦闘の合間には爆弾が、地上を襲う。地上で爆弾が炸裂するたびに、人々の叫び声が無かつたかのように消されていく。石造りの家に爆弾が当たると、大きな塊となり逃げ惑う人々を容赦無く襲う。

人の姿がまばらになつた通りには大きな穴がいくつも開いている。道の傍らには、大小のガレキが無惨な姿で散らばっている。

そんな中を、4才ぐらいの少女が泣きながらさまよつている。

「おとーさん。おかーさん。どーー」

少女の叫びは遠くまで響いている。

しかし、はぐれてしまつた父と母の返事はない。聞こえてくるのは、戦闘の音だけだ。

「おとー」

少女がもう1回叫ぼうとしたとき男の大きな手が彼女の口をおさえた。

男の人は少女の口をおさえたまま脇に抱え上げ、通りから細い道へ連れ去ってしまった。

細い道は曲がりくねつて迷路になつていて。いくらか進むと、地下へ行く階段が見えてきた。男の人は少女を抱えたまま、その階段

を降りて行った。

地下には、多くの人が避難している。男の人は脇に抱えてた、少女を地に降ろした。

1人の女の子が、放心してしまった少女に近づいて来た。そして、柔らかい声で少女を労つた。

男の人は大人と話し合っている。そして、大人の1人が、意を決した顔でここにいる人に聞こえる小さな声で何かを言つた。

そして、ここにいる人達が、男の人を残して地下の奥へ消えて行つた。

第2話 始まり 1節

乾いた暑さが、小さな食堂の中にたちこめている。小さな窓からは、淡い赤色の光りが、射しこんでいる。

そんな食堂の中に、赤い髪をした1人の女性が、丸太みたいな椅子に座っている。女性の左手には、酒の入ったガラス瓶を持つている。

そして、女性は左手に持っている瓶を、木のテーブルに置いてある小さな色ガラスのコップに注ごうとしている。

「リコー姉さん、また、酒を飲もうとしているんですか」

どこからか、少女の冷たい声が、響いてきた。

女性が、食堂の入り口を見ると、栗色の髪をした少女が立っている。少女は仕事帰りなのか、麻で作られた半袖と、半ズボンの仕事着を身につけている。

「いや、違うよ。そろそろ白夜しらゆきが、帰つてくると思つて、夕食の準備をしようとしていたんだよ」

リコーと、呼ばれた赤い髪の女性は、驚きを隠そつと早口でまくし立てた。

その間に白夜と、呼ばれた少女はテーブルに近寄ってきた。

「じゃあ、テーブルの上にあるお菓子が、今日の夕食ですか？」

白夜は、テーブルに乗っている高そつなお菓子を見回してから言った。

「うん、そうだよ」

白夜は、リコーの言い分が終わるや否や、テーブルを烈しく叩いた。叩いた衝撃で、テーブルに乗っているコップやお菓子が、小さな音を奏でた。

普段、温厚な白夜の顔は、怒りのあまりに真っ赤に染まっている。

「うん、そうだよ、ではありません！ ここに広がっている物は誰が、賄つていると思っているのですか？」

そして、姉さんが、今年の初夏に、仕事を辞めさせられてから、誰がお金稼いでいるのか分かっているのですか！」

白夜は、1通り言い終えると、肩で荒くなつた息を整えている。静かな空気が、暗くなつてきた食堂を包んでいく。耳に入つて来る音は、白夜の荒い息遣いだけだ。

「明日、仕事でも探しに行くか

静寂を破つたのは、今まで黙つていたリコーだ。

「え？」

まだ、息が上がつている白夜は、混乱の声をあげた。

「だから、明日、仕事を探しに行くよ

リコーは、今まで叱られていなかつたかのように言つた。

白夜は、何を言つたらいいのか、死にかけている魚のよつこ、口を開けたり、閉じたりを繰り返している。

「それでは姉さん、私もついていきます」

白夜はやつとの思いで、口から出でてきた言葉を結んだ。

「それじゃー、お菓子をなくそつよ

リコーは楽しんでいる声で言つた。

白夜は悲い顔をして、空いている丸太の椅子に座つてお菓子を食べ始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0515d/>

白夜トリマー達がたどる道

2010年10月10日00時05分発行